

少年時代

幸田露伴

青空文庫

私は慶応三年七月、父は二十七歳、母は二十五歳の時に神田の新屋敷というところに生まれました。其頃は家もまだ盛んに暮して居た時分で、畳数の七十余畳もあつたそうです。併し世の中が変ろうというところへ生れあわせたので、生れた翌年は上野の戦争がある、危い中を母に負われて浅草の所有地へ立退いたというような騒ぎだつたそうです。

大層弱い生れつきであつて、生れて二十七日目に最早医者に掛つたということです。御維新の大變動で家が追々微禄する、儉約せねばならぬというので、私が三歳の時なかちまち中徒士町に移つたそうだが、其時に前の大きな家へ帰りたい帰りたいというて泣いて困つたから、母が止むを得ず連れて戻つたそうです。すると外の人が住んで居て大層様子が変わつて居たものだから、漸く其後は帰りたいといわないようになったそうです。それから其後また山本町に移つたが、其頃のことおじいで幼心にもうすうす覚えがあるのは、中徒士町に居た時におひやく祖父さんが御歿おひやくなりになつたこと位のもです。

六歳の時、關雪江先生の御姉様のお千代さんと云う方に就いて手習を始めた。此方とは佳人伝というものに出て居る、雪江先生おひやくのことは香亭雅談其他に出て居る。父も兄も皆雪江先生に学んだので、其縁で小さいけれども御厄介になつたのです。随分大勢習いに

来るものもありました。男女とも一室で、何でも年の大きい女の傍に小さい男の児が坐るというような体になつて居たので、自然小さいものは其傍に居る娘さん達の世話になつたのです。私はお蝶さんという方を大層好いて居て、其方をたよりにばかりして居た。其方に手を執つて世話を仕て貰うと清書きよがきなども能く出来るような気が仕た。お蝶さんという方は後に關先生の家の方になられた。其頃習うたものは、「いろは」を終つて次が「上人丘一巳」というものであつたと覚えて居る。

弱い体は其頃でも丈夫にならなかつたものと見えて、丁度「いろは」を卒おえる頃からでもあつたらうか、何でも大層眼を患つて、光を見るとまぶしくてならぬため毎日々々戸棚の中へ入つて突伏して泣いて居たことを覚えて居る。いろいろ療治をした後、根岸に二十八宿の灸とか何とかいつて灸をする人があつて、それが非常に眼に利くというので御父様に連れられて往つた。妙なところへおろす灸で、而もその据えるところが往くたびに違うので馬鹿に熱い灸でした。往くたび毎に車に乗つても御父様の膝へ突伏してばかり居たが、或日帰途に弁天の池の端を通るとき、そうつと薄く眼を開いて見ると蓮の花や葉がありと見えた。小供心にも盲目になるかと思つて居たのが見えたのですから、其時の嬉しかつたことは今思い出しても飛び立つようでした。最も永い病気で医者にもかかれば、

觀行院様（祖母）にも伴われて日朝様へ願を掛けたり、色々苦勞したのです。其時日朝上人というのは線香の光で経文を写したという話を觀行院様から聞いて、大層眼の良い人だと浦山しく思いました。然し幸に眼も快よくなつて何のこともなく日を過した。

夏になると朝習いというのが始まるので、非常に朝早く起きて稽古に行つたものです。ところが毎朝通る道筋の角に柳屋という豆腐屋がある、其処の近所に何時も何時も大きな犬が寐転んで居る。子供の折は犬が非常に嫌いでしたから、怖こわ々に遠くの方を通ると、狗いぬは却つて其様子を怪んで、ややもすると吠えつく。余り早いので人通は少し、これには実に弱りました。或朝などは怖々ながらも、また今にも吠えられるか噛みつかれるかと思つて、其犬の方ばかり見て往つたものだから、それに氣をとられて路の一方の溝の中へ落ちたことがあつた。別段怪我もしなかつたが、身体中汚い泥染れになつて叱られたことがある。其後親戚のものから、これを腰にさげて居れば犬が怖よりれて寄つかぬというて、大きな豹だか虎だかの皮の巾着を貰つたので、それを腰にぶらぶらと下げて歩いたが、何だか怪しいものをさげて居たためでもあつたかして犬は猶更吠えつくようで、しばしば柳屋の前では閉口しました。然しまた可笑しかつたのは、其巾着をさげて机の前に坐つて手習をして居ると、女の人達が起つたり坐つたりする時に、動やもすると知らずに踏みつける、

すると毛がもじやもじやとするのでキャツと云って驚く。其キャツと云って吃驚するのが如何にも面白いので、後には態と紐を引ばつて踏みそうなところへ出して置いて遣るので。彼のお蝶さんという方なども私の後へ廻つて清書の世話などを焼く時に、つい知らずに踏みつけて吃驚した一人でした。犬に吠えられるのは怖かったが、これはまた非常に可笑しく思ったから今以て思い出して独り興ずる折もある位で、本宅を捜したらまだ其大巾着がどこかにあるだろうと思ひます。

手習いの傍、徒士町の會田という漢学の先生に就いて素読を習いました。一番初めは孝経で、それは七歳の年でした。元來其頃は非常に何かが嚴重で、何でも復習を了らないうちは一寸も遊ばせないという家の掟でしたから、毎日々々朝暗いうちに起きて、蠟燭を小さな本箱兼見台といったような箱の上に立てて、大声を揚げて復読をして仕舞いました。そうすれば先生のところから歸つて来て後は直ぐ遊ぶことが出来るのですから、家の人達のまだ寝ているのも何も構うことは無しに、聞えよがしに復読しました。随分迷惑でした。そうですが、然し止せ^よということも出来ないのです、御母様も堪えて黙つて居らしたそうです。此復読をすることは小学校へ行くようになってからも相替らず八釜敷^{やま}いうて遣らされました。併しそれも唯机^{いし}に對つて声さえ立てて居れば宜いので、毎日のことゆえ文句も

口癖に覚えて悉皆暗誦して仕舞つて居るものですから、本は初めの方を二枚か三枚開いたのみで後は少しも眼を書物に注がず、口から出任せに家の人に聞えよがしに声高らかに朗々と読んで居るのです。而して誰も見て居ないと豆鉄砲などを取り出して、ぱちりぱちりと打つて遊んで居たこともある。そういうところへ誰かが出て来ると、さあ周章あわてで鉄砲を隠す、本を繰る、生憎開けたところと読んで居るところと違つて居るのが見あらわされると大叱言を頂戴した。ああ、左様々々そうそう、まだ其頃のことと能く記憶して居ることがあります。前申した會田という人の許へ通つて居た頃、或日雨が大層降つて溝が開いたことがあります。腿立を挙げる智慧も無かつたと見えて袴を穿いたままのろと歩いて行って、其儘上りこんで往つたものだから、代稽古の男に馬鹿々々、馬鹿々々と立続けに目の玉の飛び出るほど叱られた。振返つて見ると、成程自分のあるいた跡は泥水が滴つて畳の上にならずとポタポタが着いて居た。併し此代稽古の男は兎角自分に出鱈目を教える男だったから、それに罵られたのが残念で残念で堪らなかつた為め忘れずに居ります。

九歳のとき彼のお千代さんという方が女子師範学校の教師になられたそうので、手習いは御教えにならぬことになりました。で、私を何所へ遣つたものでしょうと家でもつて先生に伺うと、御茶の水の師範学校付属小学校に入るが宜かろうというので、それへ入学させ

られました。其頃は小学校は上等が一級から八級まで、下等が一級から八級までという事に分たれて居ましたが、私は試験をされた訳では無いが最初に下等七級へ編入された。ところが同級の生徒と比べて非常に何も彼も出来ないのです、とうとう八級へ落されて仕舞つた。下等八級には九つだの十だのという大きい小供は居なかつたので、大きい体で小さい小供の中に交ぜられたのは小供心にも大に恥しく思つて、家へ歸つても知らせずに居た。然し此不出来であつたのが全く学校なれざるためであつて、程なく出来るようになって来た。で、此頃はまだ頻りに学校で抜擢ということが流行つて、少し他の生徒より出来がよければ抜擢してずんずん進級せしめたのです。私もそれで幸いにどしどし他の生徒を乗越して抜擢されて、十三の年に小学校だけは卒業して仕舞つた。

この小学校に通つて居る間に種々の可笑しい話があるので。同級の生徒の中に西勃平もだちといふのと細川順太郎といふのと私と、先ず此三人が年も同じ十一二歳で、気が合つた朋友であつた。この西勃平といふのは、ああ今でも顔を能く覚えて居る。肥つた饅頭面の眼の小さい、随分おもしろい盛んな湾泊者わんぱくもので、相撲を取つて負かして置いて罵つて遣ると、小さい眼からポロポロと涙を溢しながら非常な勢いで突かかつて来るといふような愉快な男でした。それで、己は周勃おれと陳平とを一緒にしたんだなどと意張るのです。すると

私が、何だ貴様が周勃と陳平とを一緒にしたのなら己は正成と正行とを一緒にしたのだと云つて互に意張り合つて、さあ来いというので角力を取る、喧嘩をする。正行が鼻血を出したり、陳平が泣面をしたりするといふ騒ぎが毎々でした。細川はそういうことは仕ないおとな大人のような小児こどもでした。此二人は後にまた中学校でも落合つたことがあるので能くおぼえて居ました。

また此外に矢張りこれも同級の男で野崎というのがありましたが、此野崎の家は明神前で袋物などをも商う傍、貸本屋を渡世にして居ました。ところが此処は朝夕学校への通り道でしたから毎日のように遊びに寄つて、種々の読本の類を引ずり出しては、其絵を見るのと絵解を聞くのを楽しみにしました。勿論草双紙の類は其前から読み初めました。初めの中は変な仮名文字だから読み苦くつて弱りましたが、段々読むに慣れてスラスラと読めるようになった。それから後は親類の家などへ往つて、児雷也物語とか弓張月とか、白縫物語、田舎源氏、妙々車などいうものを借りて来て、片端から読んで一人で楽しんで居た。併し何歳頃から草双紙を読み初めたかどうも確かにはおぼえませんが、十一位でしたらうか。此頃のことでした、観行院様にお前は何を仕て居たいかと問われたとき、芋を喰つて本を読んで居ればそれで沢山だと答えたそうですが、芋ぐらいが好物であつたと見えます、ハ

ハハハ。猶学校友達の中に清川というのがありました。これは少し私より年長としうえで、家は蒔絵職でした。仲の好い友達でしたから折々遊びにもゆきましたが、これが読本を家で読んで来ては、学校の休息時間に細川や私なぞに九紋龍史進、豹子頭林冲などという談しを仕て聞かせたのでした。

前に申したように御維新の後は財産を亡くしたという訳では無かったです、家は非常に質素な生活を仕て居て、どうかすれば大工の木ツ葉拾いにでも遣られようという勢いでしたから、学校へ遣つて貰うのさえ漸々出来たような始末で、石筆でも墨でも小さくなつたからとて浪りに棄てたおぼえは無い。指に持ちにくくなつた鉛筆などは必ず少し太い筆の軸へ挟んで用いて居て、而もこれを至当の事と信じて居ました。種善院様（祖父）も非常に厳格な方で、而も非常に潔癖な方で、一生膝も崩さなかつたというような行儀正しい方であつたそうですが、観行院様もまた其通りの方であつたので、家の様子が變つて人少なになつて居るに關わらず、種善院様の時代のように万事を遣つて往こうというので、私は毎朝定められた日課として小学校へ行く前に神様や仏様へお茶湯を上げたりお飯を供えたりする、晩は灯明をも上げたのです。それがまた一ト通のことなら宜いが、なかなかどうしてどうして少くないので、先ず此処で数えて見れば、腰高が大神宮様へ二つ、お

仏器が荒神様へ一つ、鬼子母神様と摩利支天様とへ各一つ宛、御祖師様へ五つ、ほとけさま家廟

へは日によつて違うが、それだけは毎日欠かさず御茶を供えて、それから御膳をあげるの
 で、まだ此上に先祖代々の忌日命日には仏前へ御糧供というを上げねばならぬ。これはた
 とえ味噌汁に茄子か筍の煮たのにせよ御膳立をして上げるのだから頗る手間がかかるので、
 これも過去帳を繰つて見れば大抵無い日は無い位のもの。また亥の日には摩利支天には上
 げる数を増す、朔日十五日二十八日には妙見様へもという工合で、法華勧請の神々へ上げ
 る。其外、やれ愛染様だの、それ七面様だのと云うのがあつて、月に三度位は必ず上げ
 る。まだまだ此外に今上皇帝と歴代の天子様の御名前が書いてある軸があつて、それにも
 御初穂を供える、大祭日だというて数を増す。二十四日には清正公様へも供えるのです。
おばあさま御祖母様は一つでもこれを御忘れなさるといふことはなかつたので、其他にも大黒様だの
 何だのがあるので、如何な日でも私が遣らなくてはならない務めは随分なものであつた。
 勿論嚴格に仕付けられたのだから別に苦勞には思わなかつたが、兎に角余程早く起き出て
 手捷くやらないでは学校へ往く間に合うようには出来ないのみならず、この事が悉皆済ん
 で仕舞わないうちは誰も朝飯を食べることは出来ないのです。斯このように神仏を崇敬す
 るのは維新前の世間の習慣ならわしで、ひとり私の家のみのことではなかつたのだが、私の家は

御祖母様の保守主義のために御祖父様時代の通りに厳然と遣つて行つた、其衝に私が当らせられたのでした。畢竟祖父祖母が下女下男を多く使つて居た時の習慣が遣つて居たので、仏壇神棚なども、それでしたから家不相応に立派でした。しかし観行院様はまた洒落たところのあつた方で、其当時私に太閤が幼少の時、仏像を愚弄した話などを仕てお聞かせなさつた事もありました。然し後年、左様私が二十一歳の時、旅から歸つて見たら、足掛三年ばかりの不在中に一家悉く一時耶蘇教になつたものですから、年久しく堅く仕付けられた習慣も廃されて仕舞つて、毎朝の務も私を限りに終わりました。こういう家庭のありさまでしたから、近來私の一家族の中に、学校へ行くのに眼が覚めぬなどというもののあるのを聞くと、思わず知らず可笑しく思う位です。

学校へゆくほど面白いことは無いと思つて居たため、小学校へ通つて居る間一日も欠席したことは無かつたでした。家の中の方が学校よりも都て厳格で、山本町に居る間は土蔵位はあつたでしたが下女などは置いて無かつたのに、家中揃いも揃つて奇麗好きであつたから晩方になると我日課の外に拭掃除を毎日々々させられました。これに就いて可笑しい話は、柄が三尺もある大きい薪割が今も家に在りますが、或日それを竊に持出しコツコツ悪戯して遊んで居たところ、重さは重し力は無し、過つて如何なる機会にか膝頭を斬りま

した。堪らなく痛かったが両親に云えば叱られるから、人前だけは跛も曳かずに瘦我慢して痛さを耐えてひた隠しに隠して居ましたが、雑巾掛けのときになって前へ屈んで膝を突くのが痛くて痛くてほとほと閉口しました。然し終つひに其の為に叱られるには至りませんでした。今でも其疵痕は膝に名残りを止めてあります。斯ういうように朝も晩もいろいろの事をさせられたのは、其頃下女も子守も居なかつたのに、御父様は昼は家に居られないし、御母様は私の下に妹やら弟やらを抱えて居られたのでしたから是非もない事でした。然しこういうように慣らされたため今でも弟などのように氣不勝ではありません、至つてまめな方です。

観行院様は非常に嚴格で、非常に規則立つた、非常に潔癖な、義務は必ず果すというような方でしたから、種善院様其他の墓参等は毫も御怠りなさること無く、また仏法を御信心でしたから、開帳などのある時は御出かけになり、柴又の帝釈あたりなどへも折々御出でになる。其時に自分は連れて往つて頂く、これはまあ折々の一つの楽しみであつたのです。其他に慰みとか楽しみとかいって玩おもちゃ弄物を買うて貰うようなことは余り無かつたが、然し独楽と紙鳶とだけは大好きであつただけそれ丈上手でした。併し独楽は下劣こどもらの児童等と独楽あてを仕て遊ぶのが宜くないというので、余り遊び得なかつたでした。紙鳶は他の子

供が二枚も三枚も破り棄てて仕舞う間に自分は一枚の紙鳶を満足に颺あげて遊んで居た程でした。これは紙鳶を破るような拙なことを仕無いのと、一つは破れた紙鳶でも繕うことが上手であつたからで、今でも私の手にかけてれば何様な紙鳶でも非常に良い紙鳶に仕て見せます、ハハハ。で、糸目の着加減を両かしぎというのにして、右へでも左へでも何方へでも遣りたいと思う方へ紙鳶が傾くように仕た上、近傍に紙鳶が揚つて居ると其奴に引からめて敵の紙鳶を分捕つて仕舞うので、左様甘く往くことばかりは無かつたが、実に愉快で堪えられないほどの事におもつて居たのです。

家庭は世の常を越えて嚴重でありましたが、確にこれは私の益になつたに相違無いです。別に家庭の教育などという論は無い頃のことでしたが、先ず毎日々々復習を為し了らなければ遊べぬということと、朝は神仏祖先に対して為るすだけの事を必ず為る、また朝夕は学校の事さえ手すきならば掃除雑巾がけを為るということと、物を粗末にしてはならぬという事とで責め立てられたのは、私の幸福になつたに相違ないと思います。また観行院様は至つて注意深い方で、例えば星は四時地位の定まらないものであるのに一寸戸外そとへ出て天そらを仰いで星を御覧になると、ああ彼星が彼辺に在るから最う何時であるなぞと、ちゃんと時を知つて居られた。そういう調子であつたから子供心にも時々驚いて服した。また植物

にしても左様である、庭の雑草などの名や効能などを教えて下さった事が幾度もある。私の注意力はたしかに其為に養われて居るかと思ひます。

小学校を了えて後は一年ばかり中学校を修めたが、それも廃めて英学を修める傍、菊地松軒という先生に就^つて漢学を修めました。併し最うそれからの談は今は御免を蒙りたいです。

青空文庫情報

底本：「露伴全集 第29巻」岩波書店

1954（昭和29）年12月4日発行

初出：「今世少年 10月増刊号 今世英傑少年時代」

1900（明治33）年10月

※初出時の表題は、「小説家幸田露伴君」です。

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記を次の通りあらためました。

1. 旧仮名づかいを現代仮名づかいにあらためました。
2. 常用漢字表、人名漢字別表に掲げられている漢字を新字にあらためました。
ただし、人名については底本のままとしました。

3. ひらがな・カタカナの繰り返し返し記号は、そのまま仮名を繰り返し返すようあらためました。

入力：地田尚

校正：今井忠夫

2001年6月18日公開

2009年9月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

少年時代

幸田露伴

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>